

京都市東山開晴館 視察 報告書



- 1 期 日 平成27年11月13日（金）
- 2 参加者 旭川市立神居小学校 教諭 鈴木 宏始
- 3 タイムテーブル

1～6年	スパイラル タイム	公開授業 1:45～2:30	移動	全体会 2:45～5:00 児童生徒による発表 パネルディスカッション (小中一貫の可能性について)
7～9年		公開授業 1:40～2:30		

受付 1:00～1:30 1～6年生のスパイラルタイムは1:30から公開

4 京都市の考える小中一貫教育

小・中学校種間の段差を解消し、9年間の学びを一体のものにとらえ、発達段階を踏まえた一貫性のある継続的な指導が求められている中、指導方法など望ましい連携や接続の在り方を検討することが重要となる。

子どもを中心にした学校間の滑らかな接続を重視し、全ての小・中学校で取り組むこととしている。小中一貫教育は、そのこと自体が目的ではなく、「中1ギャップ」や、子どもたちの心身の発達の早期化などに対応しつつ、子どもたちの生きる力を育てていくための「システム」「仕組み」である。小学校と中学校が、子どもにまつわる情報を共有して、学びと育ちを義務教育9年間の枠でとらえ直し互いの教育活動を改善していくことが重要と考えている。また、地域と一体となって取り組み、子どもたちの能力を引き出していくことも大切である。

(京都市教育委員会ホームページより)

5 東山開晴館について

【学校概要】



世界文化遺産である清水寺をはじめ、わが国有数の観光資源をもつ京都市の東山に位置し、平成23年4月、弥栄中・洛東中の2中学校、白川小・新道小・清水小・六原小・東山小の5小学校の計7小中学校が統合して作られた施設一体型小中一貫校である。伝統と歴史をもつ学校を統合した5校目の小中一貫校である。

児童生徒数は863名、教職員数は96名、学級数は33である。小学校6年間と中学校3年間を「ファースト(1～4年)・セカンド(5～7年)・サード(8・9年)」の3ステージ制とし、きめ細かにステップアップを図り、系統的・効果的な教育が行えるようにしており、特に、小中のつなぎ目として、セカンドステージの結束に意識的に取り組んでいる。本年度はあらゆる教育活動の中で「思考・判断・行動」のプロセスを意識した活動を取り入れることで、子どもたちの主体的かつ協動的な活動の実現をめざしている。

校舎は、地上3階地下2階からなる。地下1階にあるランチルームでは、9年生と1年生が同じテーブルで給食を食べるなど、異学年間で給食交流を行っている。

【様々な取組(特別活動)】

ファーストステージの取組

(1) 縦割り活動

毎月第3水曜日に実施している。ファーストステージのリーダーである4年生が中心となって、どんなことをしたいのか事前に話し合い、計画し実行している。

(2) 縦割り遠足

4年生がリーダーシップを取り、グループをまとめる力を培うことを目的としている。行き帰りのバス移動も縦割りグループ毎に座り、4年生がグループの人数確認や体調管理などをする。遠足の内容は、グループ毎にオリエンテーリングを行ったり、それぞれで決めたポーズで写真を撮ったりするなどグループのつながりを強める活動である。

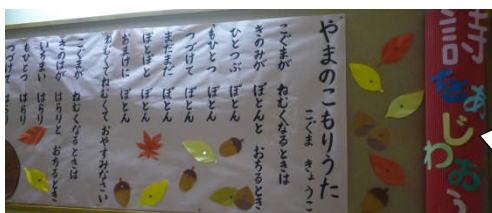
セカンドステージの取組

(1) スポーツフェスティバル

主体性・自主性を高めることが大きなねらいである。セカンドステージの5・6・7年生が縦割り班をつくり、準備段階から当日の運営等までを児童生徒が行う。応援内容の決定や掲示物の作成等の準備、当日の開閉会式の司会や準備運動の模範等をセカンドステージのリーダー学年である7年生が行う。

(2) 縦割り遠足(校外学習)

7年生が世界遺産に関する様々な情報を収集し、それぞれの班が行く目的地の歴史や由来を調べるとともに、学校から目的地までの経路や時間内に帰校するための時間配分、日程などの計画を含めた取組を行っている。



廊下には、詩や写真がたくさん貼ってあった。言語活動を豊かにする取組の一つとして貼ってある。

サードステージの取組

(1) 卒業生講座

3月に卒業したばかりの卒業生を講師として迎え、9年時にどのようにして進路や受験校を決定したか、受験勉強の進め方やコツ、入学試験のときの様子、進学先での様子を聞く講座を実施している。

(2) 高校講座・大学巡り・職場体験

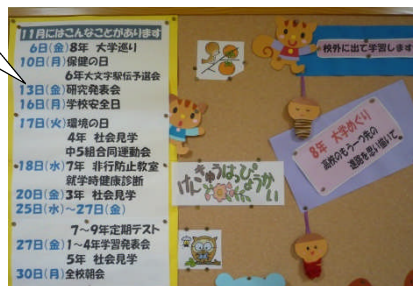
8・9年生を対象学年として高校や大学の訪問、職場体験を通して進路選択の幅を広げる。

全体の取組

(1) 1年生を迎える会

1年生が安心して学校生活を送ることができるよう、**全校児童生徒で1年生を迎える雰囲気をつくる**。また、児童生徒会役員が会の計画・進行を通して、学校の代表としての責任と自覚をもつことをねらいとして取り組んでいる。

11月の行事予定表。各学年の動きが分かるようになっている。



(2) 9年生を送る会

1年生から6年生までの学年毎の出し物、7・8年生は合唱やダンス、群読、コサージュのプレゼントなど学年で工夫を凝らした発表に取り組んでいる。

(3) 全校縦割りクリーン作戦

地域と連携とした児童生徒会活動の取組として行われている地域清掃。**ファーストステージとセカンドステージの児童生徒は縦割り班の単位で校区内の各担当場所において清掃を行い、サードステージの生徒は清掃用具の貸出や引率など全体に関わる役割を担う。**

6 当日より

【公開授業（3年生）】

(1) スパイラルタイム

- ・脳の活性化をねらいとし、反復学習を徹底して行う。
- ・詩を3つ群読し、その後100マス計算を5分間行う。
- ・7年生からは、基礎基本の確実な定着を図るシステムになっている。本来、朝学活が終わってから実施するのだが、今回は公開授業前に行われた。

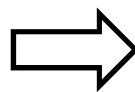
スパイラルタイムの様子。全員立って姿勢に気を付けながら詩を群読していた。



(2) 国語 「食べ物のひみつを教えます」

学習過程を明確にした自動の進行による授業

- ①前時の復習をする。
- ②文にあった接続詞を考える。(一人学び)
- ③文を構成する。(一人学び)
- ④近くの人と読み合い交流する。(二人学び)
- ⑤もう一度文を構成する。(一人学び)
- ⑥ふりかえり (ふりかえり)



ホワイトボードの左端に本時の授業の流れがわかる工夫があった。



※司会の児童が、挙手している児童を指名したり、考える時間を設定したりするなど、児童主体の授業展開であった。また、ホワイトボード左端には、本時で行う学習の流れが常に掲示してあり、それを見ながら司会の児童が授業を進めていた。教師は発問や指示を出すだけだった。課題が全員終わるまでみんなで待ってあげるといった雰囲気があった。クラスの子でも〇〇さんと呼んでいた。年上とでも会話できる下地ができていると感じた。

【全体会】

(1) 児童生徒による発表

4年生・7年生・9年生の各代表2名が小中一貫校のよさについて、3つの観点からパワーポイントを使って発表した。

①観点1～小中のつながり～

お互いを見て成長できること。たとえば体育大会で、小学生が真剣に活動している姿を見て中学生がしっかりしないといけないと思うことや、中学生の立派な姿を見て小学生は憧れをもち目標にできることなどがいいところである。

②観点2～学習面～

東山探究（総合的な学習の時間）で5～9年生による発表会がある。ポスターやパワーポイントにより発表物を作成する。小学生にとって、中学生の発表を見ることができるのは一貫校だけである。

縦割り集会で7年生が企画するお寺巡りでは、企画力だけでなく、説明する力、読解力、なども上達した。

教科担任制も小学校で経験でき、小学校から中学校にそのまま上がる先生もいる。

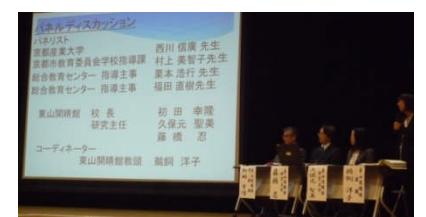
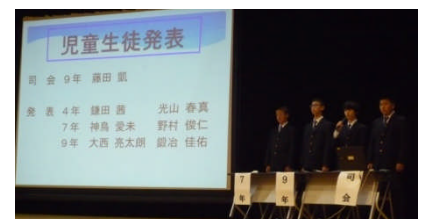
③観点3～生活面～

学校のリーダーは9年生ではあるが、ファーストステージ・セカンドステージにおいてもそれぞれリーダーを経験することができる。また、小学校から11種類の部活動を選択することができ、児童生徒が一緒に活動している。



(2) パネルディスカッション（小中一貫の可能性について）

- ・開校1年目は小中一貫というより小中一色だった。3年目からいろいろな特色が出てきた。
- ・1年目は運動会に対する苦情が200件あった。今年（5年目）は0件。
- ・こんな学校に通わせたいと思える学校づくりをしてきた。
- ・生徒が素晴らしい挨拶をするようになった。いつもなら「こんにちは」というところを「校長先生、いつもご苦労様です」や「お体にお気を付けてください」など相手を気遣う挨拶ができるようになってきた。



7 所感

小中一貫校の強みを最大限に活かした特色のある学校であった。その中でも、神居地区の小中連携に活用できそうなことがいくつかあった。

一つは、児童生徒間の交流場面を多く取り入れること。主に「給食交流会」「小中交流発表会」などがあると考えられる。給食交流会では、小学生と中学生と一緒に食べるなどして、お互いの情報を交換したり食べ方指導をしたりする。小中交流発表会では、国語や総合的な学習の時間に調べたことについて、小学生は中学生に、中学生は小学生を相手に発表する。交流することで中学校の雰囲気に慣れたり、中学生は小学生の模範となり、小学生は中学生に憧れて目標とするという気持ちを育てたりすることに有効であると考えられる。



二つは、教師間の連携を深めること。授業参観を通して単元の縦のつながりを再確認し、同じ目線で子どもたちを育てるという意識をもつことができると考える。また、体験授業などで、中学校の授業を子どもたちが実際に受けたり参観したりすることも大切であると考えられる。

児童生徒が9年間、よりよい学校生活を送ることができるよう、小学校と中学校がより連携を深め、指導に当たることが重要であることが分かった。児童生徒のために何ができるのかを考え、実践していくようこれからも研究を重ねたい。

